

---

## 『猫かぶり姫と天上の音楽』 イラストギャラリー

もり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『猫がぶり姫と天上の音楽』 イラストギャラリー

### 【Zコード】

Z3233P

### 【作者名】

もり

### 【あらすじ】

頂いたイラストを紹介させて頂きます。

また、パラレルストーリーや、超短編の番外編を掲載させて頂いています。

\*マークがイラストです。

# 花木 天上の音楽

なんとなんと、嬉しい事に卯堂成隆様から『猫かぶり姫と天上の音楽』のイメージイラストを頂いてしました！！  
なんてこつたい！！

シーンは38話の「天上の音楽」のイメージです！！

本編に挿絵として挿入しようかとも思つたんですが、人それぞれのイメージもありますので別物として、卯堂様に許可を頂き掲載させて頂きました。

✓.i14545 | 1402✓

綺麗ですよね～ ムフフフ

卯堂様、ありがとうございます！！

話は変わりますが、人それぞれのイメージって本当にありますよね。特に私の書いている人物は描写が甘いのでかなり皆さまバラバラだと思います。申し訳ありません。

・・すみません。  
友達と話していくルークのイメージの違いに、本当に申し訳なく思いました。

卯堂様、本当に素敵なイラストをありがとうございました！

## ジャステイン&リリアーナ\*

またまた卯堂様から頂きました！！

ジャステイン&リリアーナです！！

♪ 114996 — 1402 ♪

なんというか・・・大人の色気？ww

男性視点だとこんな感じなのかな?????

と勉強になります（爆） 何を勉強するのやう。

ちなみにリリアーナの服装ww

まあ、私のイメージもドロンジョ様の仮面なしつていうが、綱タイツに二一ハイブーツがいいですねww

さて、もうすぐ登場するシエラがこのシーンを見てどう思つたのやう。  
：

卯堂様、ありがとうございました！！

## リカルド\*

皆さんが素敵なイラスト描いているから、ついついウズウズして描いてしまいました(汗)

一応、人気のないリコっちなら(てか、むしろ嫌われる?w)、イメージ崩壊もないだろ?なと思って、私の中のイメージを何とかですが・・・

うーん・・・

まあ、結局イメージ通りにはいかないと言つ事で・・・

> i 1 5 3 1 2 — 2 1 3 4 <

いつも穏やかな顔してるはずなのに、なんだかアンニコイに仕上がりてしましました。

どうでしょう?

皆さんが、もしイメージして下をみて、イメージ壊しちゃったならすみません。

まあ、じんなもんです。

## ルーク&レナード&ティアン\*

またまた牛さん（卯堂様）からイラスト頂きましたーーー！  
もづ、なんていうか、肖像画！？的なーーー！

とりあえず、見て下さいーーー！

> i 15391 — 1402 <

どうですか？

なんかもう、悪の帝王ですよねーーー（大爆）

あれ？実はルークって悪役？みたいなwww

でも、その通りですーーー（口ラ）

花とゆかいな仲間たち以外にとつては、極悪非道な奴ですから。  
敢えて語りませんが、（語つてるがな）ルークの性格は元々、暗い奴ですから

あ、イメージ崩れたら大変なんて言い方を変えましょう。

根は真面目で、どちらかと言うと人見知りタイプ（あ、なんかかわいい・・・というか、益々イメージ崩壊？）。皇太子になる以前から、気を許した相手以外には徹底的に冷たい人間でした。

帝王学の中には命の尊さなんてありませんでした（この世界のね）

。 その辺はジャステインが頑張つて、少しマシになつたんですがね。  
・・といつ、裏設定があつたりとか・・・ww

そんな感じの?イメージがモロでとるがなー!!!.

肖像画の画家さんに対してはこんな感じだったでしょうねww  
そして、ティアンの陰険そうな顔!! wwwさすが、画家さん内面  
をよく映してらつしゃる。

1人、明るい雰囲気のレナードが、すうじいい奴オーラ出しますよね!!

ティアンと同じバーツなのに、ここまで違う印象が出せるなんて  
すごい!!

卯堂様・・・あ、牛さんw本当にあつがとつぱれこました!!

年始企画 パラレルローお出用。（前書き）

とある作品とのコラボです。

## 年始企画 パラレルDEお正月。

「新年、明けましておめでとうござります。今年もよろしくお願い致します」

「…………よろしく?」

青鹿の間に入った途端、ルークは正座して三つ指ついた花に迎えられた。

「ハナ…………その格好…………」

ルークの後に続いて入って来たレナードが思わず呟く。

「はい、お正月なんで振袖です」

「正月?」

ルークは訳がわからないといった表情で問う。

花が正座している場所、本来なら応接ソファなどが置かれている場所は何重にも絨毯が敷かれ、そこに布が掛けたテーブル?が置かれていた。

「ハナ…………それは…………」

「はい、翔さんが送つて下さったコタツです。ミカンもありますよ」

「…………あいつか」

ルークの何かを含んだ咳こみは気付かず、花は嬉しそうに続ける。

「あ、靴は脱いで下さいね。で、直接床に座つてください。あんな感じに」

と指差したのは、すっかりコタツで窓いくつりでいるアポルオン。

「いや、待て。なぜお前がそこまでこいつて、しかもミカソヒヤヒを食つてんだ！？」

花が、「アポルオンさんにセッティングを手伝つてもらつたんです」と答えるが、当のアポルオンはレナードの突つ込みを無視して花に訴えた。

「なあ、姫さん。こire美味いけどなんか指が黄色くなつてきた気がする……」

「それは食べすぎです。あんまり食べ過ぎるとオネショしちゃいますよ？」

「バカ！誰がオネショなんてするかー今、俺様が何歳だと思つてんだ！？」

「おいくつになられるんですか？」

「…………おー、レナードー。ひょつとメレフイスに聞いてみてくれー！」

「バカか！？自分の歳も数えられないバカの為になんでわざわざ

魔力使つてメレフィス呼び出さなきやならないんだ、バカ！…

「バカつて何回言つてんだ！？バカ！…バカつて言つほうがバカなんだよ！バカ！…」

「お前の方が言つてんだろうが…！バカ！…」

「……お前ら、いい加減出て行け」

それまで黙つていたルークが怒りを抑えた声で告げた。

その殺氣さえ漂う氣配にアポルオンは押し黙り、花にすがる様な視線を向けて言つた。

「俺……まだその箱の中身見てない……食いもんなんだろ？」

そうして指差したのはコタツの上に置いてある二段重ねのお重。

「あ、じゃあもうすぐディアンも来るはずですので、せつかくなんでもみんなで食べましょう。ね？」

ルークに向けて嬉しそうに微笑む花に、ルークは頷くしかなかつた。

やがて、青鹿の間に「遅くなりました」と言いながらやつて来たディアンは異様な光景に一瞬眉を寄せたが、すぐにいつもの暗黒笑顔でコタツに座るアポルオンの首根っこを掴むと後ろに放り投げ、今までアポルオンがいた場所に座つた。

花は、人？がマンガみたいに飛ぶのは初めて見たな……などと思いつながらも、その後、ディアンの後ろで正座して捨てられた子犬のようにシュンとしているアポルオンが段々と氣の毒になつてきたのだった。

「あの、アポルオンさん……私、ちょっと詰めますから」  
花の提案にルークが間髪入れず口を挟んだ。

しかし花はシヨンとしたアポルオンを見ていられず……

「私、ルークの隣に座つてはダメですか？少し狭くなりますけど……」

黄、沙耶に教わった必殺？上目遣いでお願いしてみた。まさか使う日が来るとは思わなかつたが。

「……構わないが」

ルークのアシテに、花は喜んで隣へと座つた。すかさずアポルオンが空いた場所に座る。

ニコニコと嬉しそうにする花に、ルークも優しく微笑んだ。

「……熱いですね」

「もうだな……」の「タツとやらが熱いのかな……」

ボソボソ呟くレナードとディアンの2人とは別に、アポルオンは待ちきれないようにお重に手をかけた。

「なあ、姫さん！開けてもいいか！？」

「はい、どうぞ」

そうして開けられたお重の中身を覗き、みんなが興味津々の様子で呟く。

「綺麗ですね」

「見た事無いものばかりだな」

「うわ！なんだここの赤いの？食えるのか！？」

「ハナ、これは？」

ルークの質問に花は嬉しそうに笑つて答える。

「御節です。お正月の縁起物なんです。翔さんのお姉さまが作つて下さったんですよ」

「…………あいつに姉がいるのか？」

「はい、双子のお姉さまなんだそうですよ。お料理がすっごくお上手らしくて、すっごく自慢のお姉さまらしいです。いつかお会いしてみたいですよね？」

「…………あいつの双子…………それよりもハナ、いつの間にあいつとそんな話をしたんだ？」

「…………？ 結構前ですけど……翔さんって本当に面白い方ですよね？ 今回、お忙しいようでお会いできなくて残念でした。でもルークが手紙を渡してくれたおかげで、こうして私の國のお正月を迎える事ができてすごく嬉しいです。ルーク、ありがとうございます！」

「…………いや」

なぜか田を逸らすルークだったが、花は気付かず「ディアンへと視線を移した。

「ディアンもお忙しいのに、翔さんからの贈り物の受け取りをして下さったんですね？」アポルオンさんにお手伝いもしてもらつて助かりました。ありがとうございます」

「いえ、全然かまいませんよ？むしろ面白いものを見る事ができて楽しかつたです」

ディアンの返事に不思議に思いながらも花は、さつきから変な咳をしているレナードに心配の声をかけた。

「レナード大丈夫ですか？」

「いや、大丈夫だ……それよりハナ、これがハナの国の風習なのか？」

「え？……そうですね、日本では……私の実家にはコタツはなかつたんですが、憧れだつたんです。それに御節はいつもどこのホテルの物だつたので、こうじつた手作りの物も憧れてて……」

そう言つて花は微笑んだ。

「そつか……じゃあその……実家が懐かしくなつたり、帰りたくないつたり……」

言い難そうに尋ねるレナードに花は更に笑みを深くする。

「そうですね……懐かしく思う事はありますけど、故郷は遠くにありて想うものです。私は帰りたいとは思いません。ずっとここにいたいです」

花はルークに向かつてニシコリと微笑んだ。  
それにルークも微笑み返す。

「やはり熱いですね、ここは……」

「そうだな……そろそろ帰るか……」

2人はそう言つと立ち上がり御節をひたすら食べながら「うお、  
これすっペー……お? こつちは甘い……この黒いのは豆か?」など  
と啖いてくるアポルオンの首根っこを、ディアンが掴んだ。

「それでは、私たちはこれで失礼致しますので、あとはお2人でし  
つぱりと……」

ディアンはそう言つと、アポルオンを引き摺つてレナードと共に  
去つて行つたのだった。

「はい……?」

花はなんだかよくわからなかつたが、それでもルークに向き直る  
と改めてお礼の言葉を口にした。

「こんなに樂しいお正月は初めてです。ルーク、本当にありがとうございました」

花の心からの嬉しそうな笑顔にルークは優しくキスで返すと、そ

のまま頬を染める花を抱き上げた。

「ルーク！？」

「……少し、抱きついに

帶が邪魔をする為か、ルークは小さく咳きながら花を寝室へと連れて行く。  
そして……

「……ハナ、これはどうやって脱がすんだ？」

「え？」

軽く眉を寄せて聞くルークに花は赤くなり、そしてハツと何かを思いついたよつて口を開いた。

「ルーク！まさか……悪代官様がしたいんですか！？」『あ～れ～』『つてやつですか！？……ごめんなさい、あれはコントの中だけで実際は『あれ？』くらいで終わってしまうんです。残念ですが……』

ルークには花が何を言つているのか全く理解できなかつたが、残念そうにする花に「そうか、残念だな」と思わず返してしまつた。その返事を聞いて花は、やっぱりそういうのは男のロマンってやつかな？と思いつつ、今度代わりになる事を翔さんに相談してみよう、と決意したのだった。

## 年始企画 パラレルローお出用。（後書き）

パラレルのようだ、そうでもない・・・かも? www  
お楽しみ企画といつより、ひたすら私が楽しんだ企画でした。  
双子ちゃんを快く貸してくれたばかりか、のつてくれてありがとうございました  
皆様もお付き合いで下わこおして、ありがとうございました

## リリアーナ\*

リリアーナのつもりでしたが、どうにもひびきもダメですね。  
アイタタタタ・・・・・

> 16444-2134 <

妖艶さも何もありません。

色塗りしてると段々と雑になってしまいます。

背景にいたつては本当に適当なのをいれています。すみません。

そして色々と苦手なのですが、一番の苦手は髪の毛です。  
すつごい苦手です。艶も出せません。

うーん、上手くなりたいな・・・色々と・・・

ちなみに女の子の胸は大きいのしか描けません。

よって、花は描けません（爆）

花っちは、よせてあげて言い聞かせてますから。

・・・と、言いつつ、本人が気にするほどではないんですがね・・・  
周りがでかいんです。ユシユタールの女性は魔法でも使って大きく  
してるのでかも？

## リカルド\* 庭子さまバージョン

鶏 庭子様から頂きました

リカルド！！

> 116607 — 2131 <

も、ええわ～。

男らしいのに、甘い感じがしませんか？

なんていうか、色氣があるよね？え？見えない？んな馬鹿な！！

私の大好きなタイプなのです！！見た目がww

皆さん、お気付きかもしだせんが、もりは密かにリカルドがお気に入りなのです。

なぜって？

それは・・・アレだからです。もうね、リコはアレの為に生まれたキヤラなので作者的に氣の毒で氣の毒で、同情せずにはいられない！～（原因は私だけね！～）

で、アレってのはまだ謎です（笑）でも、もつすぐわかるはずです。あ～これのため？みたいな・・・そしたら皆さん、リコに同情してあげて下さい。キスくらいいじやないか・・・アレなんだからww

## イメージ崩壊 パラレル小嘶 その1。 (前書き)

ひたすらイメージ崩壊(イメージを持っていて下さったらですが)  
のパラレル小嘶ですのでご注意ください!!

## イメージ崩壊 パラレル小嘶 その1。

リ「＝リ ザック＝ザ トールド＝ト

ザ「殿下！…大変です！…ターダルト王国で騒乱が起っている  
ようですね！」

リ「何！？あそここの治世は今は安定していただろー？…いつたいな  
ぜ…・・・」

ザ「なんでも、国名のターダルトに不服があるとかで…・・・」

リ「ターダルトに？」

ザ「なんでも、作者が名前に困つてその時食べていた『ハタダの  
栗タルト（会社名＆商品名）』をもじつて付けたのが気に入らない  
と…！」

リ「何！？そんな事でか！？それを言つなら、我が王国の王都コ  
ステイは作者が鼻かんでいたティッシュのスコッティから付けられ  
たんだぞ！？」

ザ「マジですか！？」

ト「ふつふつふ。それを言つなら…・・・」

「トールド…？」

ト「私なんて、作者がザックの相方ならゴーディ（知る人ぞ知る）

だらつて事で危うく「コード」にならうになつたんですよ~。」

ザ「ええー?あの、ハナ様の護衛の空氣読めないコードか!?!?  
?」

リ「いや、お前が言つな、お前が……」

ザ「殿下!失礼です!!私は読めないんじゃなく読まないんで  
す!!」

「「……」

リ「……まあ、まあ、よかつたな、トールドになつて……」

ト「何がいいんですか!!?ザックなんて名前まであるのに私は  
名前だけ!!!し・か・も!!名付けに悩んだ作者の、その時飲ん  
でいた『ドトールのカフュ・ラテ』から付けられたんですよ!!!」

「「ドトール・・・トールド・・・」

リ「……まあ、まあ、よかつたな、ラテカフュじゃなくて……」

ト「よくありません!!私だって名字が欲しいんです!!!」

ザ「じゃあ、『トールド・ラテカフュ』でいいんじゃねえか?」

ト「ふふふ……ふふふふふ……ちょっと自分が『ザックリー・  
マルケス』なんて正式名称持つてゐからって……立派なお名前をお  
持ちで羨ましいですね」

ザ「ま、待てトールド！…そのでかいハサミはなんだ！？」

「立派で、血盟のお前をお持ちのマルケス殿には、他の血盟の手の廻  
モノなんてこりないでしょ？」「…」

ザ「いろいの…何…ひつてんだ…？…めう…落ち着け  
……そのハサミを置け………殿下助けて……」

リ「…よかつた、俺も言わなくて……」

花「何ですか？」

リ「ハナ！………この聞いたんだ……？」

つづく。

## イメージ崩壊 パラレル小嘶 その1。 (後書き)

はい。アホですみません。以前、活動報告でやつてたものの続きです  
ww  
なのに、更に続いてしまつようです。。。たぶん。

## ルーク&花\* なのか？

気分転換に描いたものの・・・どうにもひびともアレですわ・・・

> i 1 7 2 2 6 | 2 1 3 4 <

これ以上ペン入れたら、崩壊する・・・イメージが崩壊する・・・とか言いながら、逃避ついでに適当に色塗っちゃいました（アイタタタ

イメージ的にはなんだか、花は小さいイメージをお持ちの方が多いかと思いますが、最初にあるように花の身長は164センチです。意外と大きい？です。

でも、細いです。しかも、なんだか花は作中でブサイク扱いを受けてるような気がしますが、あくまでも十人並みです。ちゃんとお化粧すれば、本人も言つてるように「それなり」ですww

ルークの身長は明言はしていませんが、イメージ的には183センチくらいかな？転移ばかりでろくに歩くこともしないのに、体格がそれなりにいいのは・・・  
密かに自室にダンベルとか置いて鍛えてたりしたら笑えますが・・・嘘です。実は隠れ設定？として、ルークはレナードと剣の稽古とかしてます。剣も実は扱えます。ってか、強いです。  
ちなみにティアンは若い頃はレナードの稽古に付き合つてたので、それなりに扱えますが、今は断然レナードの方が剣では強いです。でも迫力で負けますww

だけど結局、剣で一番強いのはジャステインだと思います。未だに

ジャステイン最強です。いつかジャステインの話も書きたいな～と思いつつ・・・本編をなんとかしますww

リリアーナ\* れんじょうさまバージョン

といつわけで、れんじょうあわせに描いて頂いたリリアーナ姉さんです  
ありがとうございます！！

17184  
2275 <

色つほいな！

色なしで  
携帯撮影でこの色っぽい  
W

サシは絶駄かせのを言ひるか・

なんのたよ!!

魔族の男性は羊のような角？がつて、シッポはありませんwww耳は・・・どうなつてんだろうね・・・その辺適当で（オイ！）

魔族の女性はリリー姉さんみたいに、猫耳＆シッポですが、色は黒と決まつたわけではありません。

ちなみに 金色の瞳は魔力の強さを表しているので  
色と言うわけではなく、銀色もいます。銀色の彼は・・・本編では  
魔族全員が金

魔族や魔宝の謎も明かしていきたいのですか・・・本編に組み込み  
るよう頑張ります！！

れんじゅうわせが、本郷にありがとうございました！



## おまけ番外編 剣とジーロ。(前書き)

ギャラリーを覗いて下さった方へのお礼の番外編です。隠しコマンドみたいですねww

本編に載せるには短すぎるので、一いちらで。いつか、本編に組み込むかもしれませんが・・・

## おまけ番外編 剣とジヤロ。

「ジャステイン、悪いが宝物庫へ付き合つてくれ」

近衛騎士であるジャステインは訓練を終え、昼食のために騎士達の食堂へと向かいかけた所で、兄であるセインに声を掛けられた。

「これからですか？ 構いませんが……私一人だけでよろしいのですか？」

宝物庫では、最近不穏な出来事が起つていた。

それゆえ、供にジャステイン一人で大丈夫かと問うたのだが、セインは笑つて答える。

「ハハハハハ！ お前で無理なら、何人いても変わらんさ」

ジャステインは帝國一の騎士であり、この国でジャステインより強い者は一人しかいない。

皇帝と皇太子だ。

だがそれも、魔力で勝ると言つだけで、実際に剣を手に戦えば、その結果がどうなるかはわからない。

そうして宝物庫へと踏み入った一人だつたが……。

「特に変わった様子はないですね」

ジャステインの言葉にセインは頷いた。

最近、用あつてこの宝物庫に足を踏み入れた者達が次々と倒れて

発見されるのだ。

その者達は、不思議なことに魔力を残したまま、皆一様に恍惚の表情を浮かべているらしい。

セイン達はその変事を調べに来たのだった。  
そして、少し奥へと進んだ所で、突然、ジャスティンが険しい顔つきで振り向いた。

一拍遅れてセインも振り向き、その顔を恐怖に引きつらせた。  
一人の視線の先にいるのは、紛れもない魔族。  
しかも強大な魔力を誇示するかの様にその瞳を金色に輝かせていた。

「いや～ん めっちゃ美味しいしそうなんが一人もいるう～～！」

嬉しそうに言う魔族の女に、セインは更にその顔を引きつらせ青ざめたが、ジャスティンはニッコリと微笑みを向けた。

「おや、まさかこんな所で、貴女の様に素敵な女性に出会えるとは思つてもいませんでしたね」

「……え？」

ジャスティンの思わぬ言葉に、セインだけでなく魔族の女も驚き声を上げた。しかし、ジャスティンはそんな一人構わず、更に笑みを深くして続ける。

「お名前をお伺いしてもよろしいですか？」

「リ……リリアーナやけど……」

「ああ、お姿だけでなくお名前も美しいですね。貴女にピッタリで

す

そう言つて極上の笑顔を見せたジャステインだつたが……。

ズキュンッ!!

「ん? ズキュン?」

聞こえるはずのない音に首を傾げたセインが瞬きして次に目には、リリアーナと名乗った魔族がジャステインに絡み付いている姿だつた。

攻撃を受けているのかと、一瞬疑つたセインだつたが、それはすぐ間に違つていたと悟る。

「いや～ん!! うち、心臓を撃ち抜かれてしもうた～!! 騎士様のお名前はなんて言つん?」

「ジャステインと……ジャステイン・カルヴァーと申します」

冷静に答えながらジャステインは絡み付いたリリアーナの肢体を自身からテキパキと引きはがしていく。

「いやん ジャステイン様のいけずう。でも、まあええわ。うち今日からジャステイン様の剣になるわ!! もう、縛られるのも飽きたしなあ」

「……剣?」

今度はセインとジャステインが驚きの声を上げた。

それに応えるようにリリアーナは宝物庫の奥で封じられている(

はずの）剣を指し示す。

「貴女は剣に宿られているんですか……」

「うん 」

納得したようなジャステインに、リリアーナは嬉しそうに答えた。  
そしてセインは更に納得したような声で呟く。

「それもそうか……陛下の結界が張られたこの王宮……宝物庫に魔族が侵入出来るわけがないしな。まあ、今の陛下のお力は皇太子殿下より 」

「兄上……」

独り言の様なセインの言葉はジャステインの厳しい声に遮られた。

「あ、ああ……すまない」

セインは謝罪の言葉を口にしながら、誰もいないはずの辺りを見回した後、ジャステインへと皿を向けた。

「で、その魔剣をどうするんだ？」

いつの間にかリリアーナは姿を消し、魔剣としてジャステインの手の中に納まっている。

ジャステインは大きく息を吐き出して答えた。

「兄上が陛下に『』報告される折に、私も供します。そしてこのリリアナをお借り出来るようつお願い申し上げるつもりです」

「……そつだな、私も今回の事はよくわからんから、その……直接彼女が陛下に面してくれた方が早いだろ? な……しかし、お前……騎士を廃業してもジゴロとしてやっていけるな……」

セインの「冗談混じりの言葉は、珍しく怒りを含んだようなジャスティンに否定された。

「ジゴロなど……女性の敵ではないですか! ……そんな者、私が全て排除しますよ。」

全く自覚のない弟に、セインは大きく溜息を吐いたのだった。

## おまけ番外編 初めての贈り物。（前書き）

皆様、いつもありがとうございます。

今回ばかり短い、おまけ番外編です。

## おまけ番外編 初めての贈り物。

「レナード、たんじょうびおめでと！」

ティアンは祝いの言葉と共に、両手で抱える程の大きな箱を差し出した。レナードはそれを、戸惑いながら受け取る。

「え……でも、ボクなにも……」

今日はレナードの五歳の誕生日だった。と言ひ事は、ティアンの誕生日もある。

ティアンへの誕生日プレゼントを何も用意していないレナードは今にも泣きそうな顔をしていた。

「レナード、ボクはレナードの兄だから、とつぜんなんです。でも、レナードは弟だから気にしなくていいんです。そのかわり、ちゃんと兄のボクの言ひひとをきいて下さいね」

「うんー、わかったーーー！」

「やべーーーですよーーー。これから一生ですからねーーー。」

「うーーー、せつたいーーー。」

「……」

レナードの元気のいい返事に、嬉しそうに微笑むティアン。

そんな二人のやり取りを無言で見ていたルークは、五歳になったばかりの子が見せるものではないティアンの微笑みに、この先のレ

ナードの人生を氣の毒に思つた。

「これはずつとレナードがほしがってたものですから、がんばつてボクが作りました」

ティアンはそう言つて、マーシップに用事があるからと、部屋から出て行つてしまつた。

一方のレナードはワケワケした様子で箱を開け

固まつた。

その様子を不思議に思ったルークは、レナードへと近づいて箱の中を覗き……持っていた本を落とした。

川一ヶはそのままそごと静かに後しさり廊まで行くと そごと静かに部屋から出て、ゆつくりと扉を閉めたのだった。

＊  
＊  
＊

その後、ユース侯爵家の敷地を出て、王宮へと戻る途中の馬車の中にまでレナードの悲鳴が届いた時、ルークはレナードの為に祈らずにはいられなかつたのだった。

## おまけ番外編 初めての贈り物。（後書き）

ディアンは5歳ですが、かなり大人びた子でした。そしてルークも4歳半ですが、色々と悟つてますww  
子供らしい、子供はレナードだけでした。

## バレンタイン企画 パラレルワールドはじめました。（前書き）

皆様、いつもありがとうございます。再び「ラボです。けつじじめいです。

## バレンタイン企画 パラレルDREAMはじめました。

「およ？　ヒーリングだ？」

寝室にある長椅子で本を読んでいた花は、突然聞こえた男性の声に驚いて振り向いた。

そして暖炉の中から現れた男性を見て更に驚く。

本来なら暖炉から男性が現れた事に驚くべきなのだろうが、花には一度経験がある為か、その事ではなくその男性の姿に驚いたのだった。

黒髪・黒眼のその男性は、少し灰によつて煤けてしまったダウンジャケットに、ジーンズとパーカー、その上なぜか日本刀らしき物を腰に佩いているのだ。

「あの……」

なんとか声は発したもの、それ以上言葉が続かない。そんな花と目が合つた男性は、顔を顰めて頭を抱えた。

「うつわ、間違えちゃつた……」ヒツヤリ忍び込んでルー君の寝顔激写して生写真卖ろうと思つたのに！ 女の子の部屋に侵入だなんて僕まるで変態じゃんつ……！」

「うみ」んで叫ぶ男性の言葉に花は耳を疑つた。

「……日本語？」

今まで、この世界に届けられてから何気なく耳にし、話していた

言葉が異世界語である事を花は改めて意識した。

驚きのあまり呟いた花の言葉に、男性は顔を上げて不思議そうにした。

「あれ…………ひょっとして僕、世界自体間違えた？　おおお……久し振りだつたからなあ。コシユタールでマグノリアじゃないのか？　最後まで迷つたマッシュユーダーⅢでマグノリベンだつた？　また迷子だ僕！　どうしようどうしよう、どうもしないけど！」

一人まくし立てる男性を呆気に取られて見ていた花は、再び男性と田が合つてしまつた。

……ど、どうして？　何を言えばいいのか……とりあえず、間違つてない事を教えた方がいいのかな？

「」の突然の侵入者に花は不思議と危険は感じなかつたのだが、どう反応すればいいのかがわからない。

困つてしまつた花に男性は立ち上がりと、氣の抜けるような笑顔を見せた。

「えー、取り乱しました……」「ホン。改めまして、僕は翔。明らかに不審者だけど気にしないで？　んでも、」

「自己紹介？」と共にペコリとするその仕草が日本人らしくて、花は思わず笑顔を返した。

「はじめまして、小泉花といいます……あ、今は違う？……とにかく、花です。翔さんは間違つていよいよです。」」はコシユタールのマグノリアと言つ国ですから」

「な、なんだ、間違えてなかつたんだ。さつすが僕だねっ！……つて、あれ！？ 花ちゃんつて日本人……だよね！？ ジャ、トリッパーなの！？」

「トリッパー？」

「異世界をトリップする人の事だよ。僕はパシ……いやいや、趣味と実益を兼ねてあちこちの世界をトリップしているトリッパーなんだけど、花ちゃんは？」

耳慣れない言葉によつて知つた翔の特技？に驚きつつ花は答えた。

「……いえ、私はたまたまこの世界に……」

「そつかー。『落ちた』のかあ……あ、じゃあ、元の世界に帰りたい？ 僕、頑張れば帰してあげられない事もないけど？」

「いえ、それは大丈夫です。ご心配トモつてありがとうございます」

一ヶ口リ微笑んでお礼を言つ花に、翔も一ヶ口リ笑い返す。

「うん、それならいいんだ。にしても…… れどは花ちゃん、この世界に好きな人ができたなあ？」

「えー？」

顔を真つ赤にした花を見て、翔は楽しそうに声を上げる。

「だいせいかーいー！」

「い、いえ……あの！翔さん、それにしても、どうして暖炉から現れたんですか？今日はたまたま暖かいので、火は入ってなかつたですけど……」

「うわ、マジで！？あつぶねー！まるでなんかのポントみたいじゃんっ！素でギヤグ出来るなんて……でもちょっとオイシイ。つかさー、時期的に僕つてあわてんぼうのサンタっぽいね？いよっ！メリークリスマス！あれ？なんか掛け声おかしい？」

恥ずかしくなつて慌てて逸らした話に応える翔がおかしくて、花は声を出して笑つた。

とても若いイケメンサンタだ。

それから翔は、「そうだ、いいものあげるよ」と囁ひ囁ひ、「ゴンゴン」とジャケットの左右のポケットを探つた。

「ジャジャーン……郷土料理でーす……」

弾んだ声で翔は花に手を差し出した。  
その手のひらに乗つているのは、かわいくラッピングされた小さな包み。

「これば？」

「バレンタインチョコでーす！！」

「えー？それはダメです、頂けません」

「なんで？あ、この世界にもチョコ荑があった？」

「いえ、ありませんけど……バレンタインのチョコレートなんて頂

いたら申し訳ないです

「……ああ！！ 大丈夫、大丈夫！！ これ、姉ちゃんから貰つたもんだから。しかも、まだあるし。姉ちゃんの手作りなんだけどさ……あ、姉ちゃんと僕つて双子なんだよ。んで、姉ちゃんはめちゃくちゃ料理が上手いの！！ んで、人に食べさせるのも好きだから、花ちゃんが貰つてくれたら喜ぶよ？ 絶対！！」

花が遠慮する理由に思い当たつたらしい翔は、安心をせるように説明をしてくれるのだが、花はその中に何度も出てきた『姉ちゃん』という言葉に、翔さんはお姉さんが大好きなんだな、と思いクリと笑つた。

と同時に、翔の手のひらでチョコレートが花を誘惑する。

「あの……本当に頂いてもいいんですか？」

「 もちろん……」

「……じゃあ、遠慮なく。ありがとうございます。本当にすみません欲しかったんですね」

包みを受け取つて嬉しそうに微笑む花に、翔も満足して笑うと「よしつ……」と氣合を入れるように、自身の頬を叩いた。

「んじゃ、僕帰るわっ！」

そう言つて手を振る翔に花は慌てて声をかける。

「あの……翔さんは結局、マグノリアに何をされに来られたんですか？」

「…………あ」

当初の目的をすっかり忘れていたらしい翔に、花は再び笑った。しかし翔はその事さえも全く気にしてないようで、「そうだった、そうだった」と呟いている。

「ねー、花ちゃん。この辺にさ、ルー君とレナードっていう愉快な仲間達…… ああ違った、萌えと愉快だ。じゃなくて、残念な年齢のかつちよーーお兄さん達いない?」

「…………ルー君とレナード?」

レナードって……レナードの事かな? って事は、ルー君つてルーク? ルーク……ルー君……ルー……

「…………カレー」

考えるつむになぜかカレーが食べたくなった花は思わず呟いてしまった。

「カレー?」

「はい。なんだか、急に通つてた大学の学食のカレー・ライスが食べたくなつて……」

「わかるわかる!! カレーは『急に食べたくなるランギング』上位だもんね! あとラーメンと! 現代っ子のソウルフードだ!」

「そうなんですね!! 私、この世界に不満はないんですけど、で

もたまに、無性に学食のカレーライスとか、ラーメンも食べたくない時があった時があつて……あとはやつぱり白いご飯ですよね? もう、私、何度チネるうかと……」

「えー!! 花ちゃんつてチネラー!? あ、まだチネつた事はないのか。僕もやってみようかと思つた事何度もあるよ? でも一粒が限界で『もういいつ』つて食べちゃつんだ……。

だけどやつぱり僕は姉ちゃんの料理が一番だね!! 姉ちゃんのカレーは絶品だよ? 香辛料から作る本格カレーの時もあるし、市販のルーの時もある。なんでも『ヘタに作るより日本のルーは美味しいから』だつて!

あー花ちゃんにも食べさせてあげたいなあ……でも、そうだな……んじやそ、今度来る時に姉ちゃんのは無理だけビレトルトのカレー持つて来るよ! あと、米も!-!-

「本当ですか!? 嬉しいです。ありがとうございます!-!-

「うふーんじや、僕帰るね!-!-

「えー? あ、すみません!-!- 話を逸らしておいて何ですが、レナードとル 君は?」

「………… あ」

再び当初の目的を忘れてしまつていたらしい翔に、今度は一人で笑つた。

「あの……ルー君つて、ルークつて言つんじやないですか?」

ひとしきり笑つて落ち着いた花の問いに、翔は嬉々として答える。

「そりそり…… 多分？ ルー君としか思い出せないんだけど。  
うーん、見た目はズバリ『乙ゲー』の難攻不落キャラのようない銀髪の  
美形』！」

「…… それなら、やつぱり翔さんは間違つていないです」

なぜか顔を赤くする花を見て、翔はピンときたようだ。

「あ…… ひょっとして花ちゃんの好きな人つてルー君！？ うつ  
わー！ …… つて、ひょっとしてルー君つてば、花ちゃんと一緒に  
部屋で寝てたり！？」

もはや、ゆでダ「状態の花に、翔は再び頭を抱えた。

「あつぶね！ もうちょっとでイケナイ現場に遭遇する所だつた！  
そんなとこ見られたらルー君のルー君がルー君になつちゃうあわ  
わわわ。 め邪魔虫つたら消し炭にされるとこだつた！ ひょえ～」

「…… それなら今すぐ消してやる」

「…… へ？」

突然聞こえた声に翔は素つ頓狂な声を出し、花は後ろから強くル  
ークに抱きしめられた事に驚く。

「ルーク！！」  
「ルー君！！」

どうやらルークを驚かそつと気配を消して「ツソリ現れた翔だつ

たが、話が弾んで油断したらし。

ルークはその気配を感じ、侵入者を排除しようとしたとき現れたのだが、翔を見て何かを思い出したよつて呟く。

「お前……」

が、それに構わず翔は喜び？の声を上げた。

「うつわ！ ルー君久し振りー！ 相変わらず美形だねつ。お友達の翔だよー。…… お、覚えてる！？ 覚えてるよねつ！？ あ、無反応？ やば、ひょつとしてだいぶ時間あいたもんで年齢による記憶障害起きてる！？ だめだよ、ちゃんと脳トレしないとさつー。まあいいか。ねー、突っ込み担当レナーダーいないの？」

「……」

無言だが、ルークの静かな怒りを感じた花は慌てて口を挟んだ。

「あ、あの……ここでは何ですから、居間にでも？」

「あ！ そだね……。花ちゃんとルー君の愛の巢で語り合つのは僕の命が縮まるし？ んじゃ居間にーーー！」

「……」

「ルーク？ 行きましょう？」

まるで勝手知つたるかの様に居間への扉に向かう翔の後を追つて、仕方なくといった様子のルークと花は居間へと向かった。

そして花が居間に入った途端、「怪しいけど怪しくありますーん！」

と言つて両手を上げる翔と、剣を構えた護衛のカイル、驚きに震ぞめているセレナ達が目に入った。

「あ……」

いきなり花の寝室から見知らぬ男が出て来たのだから、カイル達の反応は当然なのだが、その事を失念していた花は何と説明すればいいのかわからず言葉に詰まってしまった。

そんな花の後ろから、盛大な溜息が聞こえる。

「カイル、こいつのことは気にするな。色々と規格外だから今回の事は忘れる。それと、レナードを呼んでくれ」

「え？、ナニソレー。ルー君つて僕に対して扱い雑じやね？、わつ、キレーなお姉さん達みつけ！、初めましてー。僕、翔です。よろしく？」

翔はルークの言葉に文句を言つたかと思つたら、すぐにセレナ達へ挨拶して勧められもしないのにさつさと応接ソファへと座つた。そんな翔に、花は笑いを堪えてセレナ達にお茶を頼むと、無表情だが明らかに怒つているルークと共にソファへと腰を下ろした。

「そういうえば翔さん、今は日本語じゃないですね？さつきまでは日本語で話していたのに」

「それを言つなら花ちゃんもだけどね？、まーいいじゃん、うまいことなつてゐんだから。キニシナーライ」

「それもそうですね」

「何の話だ？」

二人の会話を聞いて訝しそうにするルークに、花は答えるようにしたが……

「あの……」

「ん？ ルー君なになに？ 嫉妬ヤキモチじぇらすい～？ あははやだな～、心配した？ あのさ、僕と花ちゃんは同じ世界の同じ国に住んでたんだよ。びっくりだよねー！ 偶つ然！」

「……と並つ事です

「……」

勢いよく簡潔に？ 説明する翔に圧倒される花だが、やはりルークは怒っている。そんなルークに、翔は更に言い募る。

「つを、ますますジヒラつてる…… 怖っ！ ねね、花ちゃん、男の嫉妬はお好き？ 萌え？ でもさ、それ表に出すとちょっとかちよ悪いよね？」

「はあ……」

「……」

花にはもはや、何をどう言えばいいのかわからない。

だが翔は、静かに怒るルークを楽しそうに見ると、何かイタズラを思いついた子供のように顔を輝かせた。

「そういえば、花ちゃんってバレンタインチョコ、誰かにあげた

「」とあるへ。

「えー? .....まあ、ある「」とこはありますか?.....」

父親と兄弟に義理チョコを一応毎年贈っていた。

父親には書斎の机の上にいつも置いておいたのだが、恐らく食べて  
くれた事はないだろう。兄弟達に關して言えば、家政婦さん伝にお  
願いしていたので受け取ってくれているのかもわからない。  
それでも、あげたことになるかな?と思いつつ花は答えたのだが、  
それを聞いた翔は非常に嬉しそうな顔をした。

「へへ、ほへ、そへなんだああ! ルー君つてば聞いてよ! バレ  
ンタインのチョコつてのはね、出身地では一大イベント.....祭り?  
なのや。『女の子が好きな男にチョコをあげて愛を伝える』ってね  
! ほつほー、花ちゃん.....ねえ~」

「え? あ、はい。そうですね」

深く考えずに答えた花は、ルークの気配.....といつか、王宮に満  
ちる魔力の圧力が増した事に気付かない。

「.....レナード、いい加減に入つて来い! !」

怒りを含んだようなルークの声に驚いた花だが、その言葉に  
応えるようにゆっくりと青鹿の扉が開いた。  
そして現れたのは、非常に嫌そうな顔をしたレナードと、非常に楽  
しそうに微笑むティアン。

「あれ? いつからいらっしゃったんですか?」

「陛下の嫉妬心について話されている少し前からです」

爽やか暗黒笑顔のディアンの答えによると、カイルがレナードを呼びに行つてすぐと言う事だ。

「んつ？ なに！？ レナードが一人？ …… いや違うな、実体化した天使と悪魔だ！ きっと僕の左右に現れて悪魔が誘惑して天使がそれを邪魔するに違いない！ いやいや、それともレナードがものつすごい高速で動いていて残像が見えてるだけなのかも！？どちらにしても楽しいな、うんうん」

「どっちも違うわ！…お前は久しぶりに会つて挨拶も無しに言う事がそれか？ こつちは俺の双子の兄のディアンだ」

天使と悪魔、言い得て妙だと花は感心していたが、二人の絶妙な掛け合い？は続く。

「なんだレナードのおにーさんか。僕は翔！ 趣味は迷子！ ああ違う駄目だよ自分で言つちゃ……。ディアンおにーさんつてステキな暗黒オーラが見えてうつとりしちゃうな。そういうの大好き！ …… なんだレナードはハラハラしてるのが分かんないんだけど……？ あ、そうか、うんうん。ね？ ディアン色々よろしく！」

元気良く両手でディアンの手を握つてぶんぶんと振る翔に、レナードは蒼白になつた。

「カケル！！」

慌てて止めに掛かろうとしたレナードだったが、ディアンの顔を見て足を止めた。

ディアンの顔には、前回の翔の訪問をメーシップから聞いた時に見せた氷の微笑みが浮かんでいたのだ。しかし、翔はディアンの微笑みに嬉しそうに笑い返す。

なぜだか、何か一人が通じ合つたような気がしたレナードは一步後じさつた。そんなレナードに翔は脱力するほど氣の抜けた笑顔を向ける。

「レナード！ いやー、暫く見ないうちに大きくなつたね！……多分？ 僕に会いたくて恋しくて堪らなかつた？ 寂しがり屋さんだなあ、こいつう！ まだ独身？ 一人寂しく冷たいベッドで枕濡らして寝てるんだろう？ ふふん、今日は僕が寂しくないよう添い寝で子守唄を歌つてあげよーう！」

「こるか！！ お前、アレを『歌』だなんて、よくも『レナード』

二人の掛け合いで面白そつて見ている花と、黙つたままドス黒く笑うディアン。

しかしルークは、楽しそう？なレナードの言葉を静かに遮つた。

「どうでもいいから、早くこれを持つて出て行け」

「うつわ、何！ 僕『これ』扱い！？ 酷いわつ！ ルー君、僕の事もてあそんで捨てるのねつ！ 僕はもつとルー君で遊びたかった…… あ、違う。ルー君と遊びたかったのにい！ ねえ花ちゃん酷いと思わない！？」

「え？ そうですね？」

「……」

益々ルークの纏う気が圧力を増したのを見て、翔はいつそう楽し  
そうに笑った。

「おおつとー、これ以上ここにこぢや恐怖の大王が降臨するわー、ヤバイヨヤバイヨ。これにてドロン致しますー、わわつ、レナード行くよつーどつかにーどこだよつー?まあこいや、じやー花ぢやんまつたねーー、約束のアレお楽しみにてー。」

「え？ おい！？」

言いたい事だけ言つた翔は、驚くレナードを引き摺つて青鹿の間から出て行つた。その後を暗黒笑顔のままのティアンが続く。それを見送つた花はレナードの為に祈らずにはいられなかつた。そして残つたのは、微妙な空気の静寂。

卷之三

何て言つんだろう……一難去つてまた一難?全然違つ。嵐の前の静けさ?あ、意味逆だ。嵐が過ぎ去つたような……台風一過?「うん、そうだ――うん……まるで台風のようでした……

「……約束のアレとは何だ？」

不機嫌を隠さないルークの問いに、黙り込んで考えていた花は我に返った。

「え？ ああ…… 翔さんが、今度いらつしやる時に故郷の懐かしいものを持って来て下さるやうなんです。翔さんって、面白くて素敵な方ですね」

微笑む花を見て、これ以上ない程にルークの気が圧力を増した。

王宮のどこかで悲鳴が上がっている。

しかし、花はそれに気付かない。

「ルークに翔さんのようなお友達がいるなんて知りませんでした」

更に続いた花の言葉に、ルークは非常に嫌そうな顔をした。

「……友達などではない。あれはレナードの……」

「レナードの？」

「……担当だ」

「担当って……なんですか、その飼育担当のよつた言い方は……」

思わず突つ込みを入れた花だったが、ある事に思い当たりハッとした。

「もしかして、異世界人には担当が付く決まりなんですか！？」ルークは私の担当だつたんですね！？……それで私の面倒を見るはめに

……

「え？ いや……」

相変わらず突拍子もない考えに辿り着いた花に驚いたルークは、思わず返事に詰まってしまった。

実際、花の事を最初は珍獣のように思っていたのだ。

そんなルークの動揺をよそに、花の思考は暴走していた。

やつぱり！…どうでもおかしいと思つたんだ！！そつかあ、  
そうだったかあ……あれ？と言つ事は……

「ルーク、『めんなさい』

「……何がだ？」

「翔さんは」自分でお家に帰れるようすで、レナードの負担は  
少ないんですけど、私は居座っちゃいました。貰えぐじを引かせてし  
まいましたね」

「……」

滞在時間が短くても、恐ろしい程の気力・体力を奪っていく翔は  
間違いなく貰えぐじだ。

前回の闖入 訪問で残していった翔の置き土産の後始末には苦  
労した……レナードが。

結局、ジャステインの力を借りなければならなかつたのだ。  
押し付けたのは自分である事をすっかり忘れて、ルークはレナ  
ードに同情した。

そしてルークは小さく息を吐き出すと、申し訳なさそうにする花を  
抱き寄せて膝の上に乗せた。

「ルーク！？」

驚き真っ赤になつた花の顔を両手で包み、ルークはキスをした。  
軽く、深く、何度も。

やつと唇を離したルークは、恥ずかしそうに俯く花を抱きしめて囁  
いた。

「当たりくじの間違いだろ？俺はハナが居座つてくれて、これ以上ないほど嬉しい」

ルークの温かい息がうなじにあたつてくすぐつたい。  
だが、次にルークが口を開いた時には、その声に少し不安が滲んでいた。

「俺はハナにずっとここにいて欲しい。俺の傍に。だがハナはカケルに会つて……故郷に帰りたくなつたか？」

「いいえ……確かに、懐かしくは思いました……でも、帰りたいとは思いません。私はずっとここに、ルークの傍にいたいです。私の担当がルークで本当に嬉しいです」

「……」

花はルークに腕をまわしてギュッと抱きついた。

「私は、カレーよりもルークが好きなんです」

「ハナ……」

「ラーメンよりも

「……」

ルークにはカレーもラーメンも全くわからない。  
だが、花を強く抱きしめながらも、喜ぶべき花の言葉をなぜかルークは素直に喜べなかつたのだった。



## バレンタイン企画 パラレルDEはじめまして。（後書き）

ルークにここまで言えるのは彼しかいない！！って翔つちですが、  
彼は『鶏庭子』様の『世界を翔ける』の登場人物です。そして、あ  
ちらでもコラボってますwwしかも本編で！！さすが翔つち！！  
この後のレナードの運命は・・・もうお分かり頂けますよね？ww  
活字にするのが気の毒でww  
とにかく、レナードに幸あれ。

# 花\* 娜柚覇さまバー ジヨン

姫柚霸さまに花のイラストを描いて頂きました～  
ありがとうございます～！

卷之二

十人並みの花には些か可愛すぎる・・・いや、これくらい可愛いのです。ルーク目線では。

この笑顔はルークの前でしか見せない笑顔でしょうね。

花は黒目がちで瞳は大きく、睫毛も長いです。色白だし、じゃあ何が・・・ってのが花の鼻の低さ（小ささ）ですかね。プププ。  
花は鏡の前でいつも「あと一センチ私の鼻が高かつたら歴史が変わったのに・・・」なんて・・・思つてはいませんが、悩みの種ではあります。

話は変わりますが、誤字脱字の多い私ですが、最近よくやるのがルーグが（他の人物も）花の事を「ハナ」って呼ばなきやならないのに「花」って呼んでしまつてる事ですね。

に「花」って呼んでしまつてゐ事ですね。

ルークの告白シーンなんて、いっぱい「花」って呼んでましたよ・・・

・愛の力で漢字呼びなんです・・・と言い訳しながら修正しました。

でも絶対に「鼻」とだけはならないように気をつけています。

・・・が、もしやつてしまつたら何よりお知らせ下さると嬉しいです。もちろん他の誤字脱字、変換間違いなどなど・・・

娜柚覇さま、本当に素敵なお可愛いイラストをありがとうございます!!

## おまけ番外編　蛙の親は蛙。（前書き）

いつも、ありがとうございます。

今回も超短い番外編です。

『初めての贈り物。』の続編？になります。

# おまけ番外編 蛙の親は蛙。

レナードとティアンの五歳の誕生日、ルークが王宮へと戻る途中の馬車の中には、馬の悲鳴が響き渡った。

それまで、息子達の誕生日のサプライズパーティ準備の指揮を取つていた双子の父親であるユース侯爵は、愛する息子のただならぬ悲鳴に慌てて駆け出した。

それを見送った。ガーナーは力とスロージャ使用人達をして、

「上母」

「なあに？」  
ディアン

「今日はボクとレナードのたんじょうびです」

「そうね」

「たんじょうびにパーティを開いてもらつても、おつともおどりません」

「そうね」

「しかも、田のまへでじゅんびをされでは、おどりかません」

「 セウネ 」

「 どれくじごおどりいたフリをすればいいですか？」

「 セウネ……今のレオナルドへいじば？」

「 むつですか 」

「 セウネ……では、今のあの人へいじば？」

「 ……てんいを忘れて走り出すへいじですか？ それもむずかしいです 」

「 セウネ…… 」

などと、一方の親子が会話をしている頃、もう一方の親子は……。

「 レナード…… 無事か……？」

ユース侯爵は、レナードの悲鳴が上がった部屋の扉を勢いよく開いて飛び込んだ。  
そして 。

「 タヤ ああああああああああああああああああああああ 」

屋敷中が振動するほどに絶叫した。

「……ディアン、あなたいつたいレオナルドに何を贈ったの？」

「え？ それは？」

答えかけたディアンの前に、ユース侯爵が転移して現れた。その顔は酷く青ざめ、呼吸も荒い。

「父上……だいじょうぶですか？」

「……」

「あなた、レオナルドは？」

「……あ？ ああ！ しまった！ ！」

アンジエリーナの問いに我に返った？ ユース侯爵は、再び駆け出した。

「……母上」

「なあに？ ディアン」

「二人のきみうじゅつに向かったほうがいいでしょうか？」

「そうね」

そうして親子はもう一組の親子の救出の為に、ゆっくりと歩き出した。

ちなみに、「気分が悪いから」と招待されていたパーティに出席せずに王宮に戻ったルークにまで、ユース侯爵の絶叫は届いていた

の  
だ  
つ  
た。

おまけ番外編 蛙の親は蛙。（後書き）

読んで下さり、ありがとうございます。  
いつか、パパ＆ママの大恋愛の話も書けたらいいな・・・と思つて  
ます。

ルーク&花\* bubuさまバージョン

bubu さまから頂いた、ルーク&花です！～ありがとうございます！

素敵なんです！！とにかく先に・・・どうぞ召し上がれ

191139-25438

ゞ、ゞゞゞうですか！？素敵でしょー？なんかもう・・・グヘヘ  
でしょー？（え？それは私だけ？）

ああ、どうしよう・・・2人の絡み（絡み言つな）が、何て言  
うか・・・

・・・\* ・・ (\*、H、\*) ウツトツ・・・\* ・・ 〔妄想中〕

花かわいいし、ルーククールで（ププ）かつこいいし、花かわいいし（あ、これ言つたな）胸が程良い大きさだし（ここ重要w）、何と言うか守つてあげたい！！つて思つちゃいます！！

ルークが花を大切に思つてる感も出てません？

頑張つて、もりもり書くぞ……つて思いました。もりだけに！

ブー！（＊）＝3

以前から、よく書いていますが、元タルクと花はこんなに早く

ひとつつく予定ではありますんでした。

私が目指していたのは逆ハーモニーなのに、早々にルークが自覚し

（予定では花が攫われてから自覚するはずだったのに）、押される形で花も自覚し（花は戻ってきてから自覚するかな？くらい）、なでもつとセルショナードでの色々もゆっくりと進むはずだったのに（その分、攫われるまでが早く進むはずだった）、ルークがイラストしているから、せっかちに進みました（めっちゃ言い訳）。とにかく、ルークがやたらと暴走するので、抑えるのに苦労します。

意外と？設定とか行きあたりばつたりだつたりするので、辻褄が合わなくなるような事がないよう気を付けながら進めてますが（あくまでもつもりです）、この先どうなることやら・・・ラストのシーンだけは決めているので、これを目指して最終エピソード頑張りたいと思います（いや、その前にあと少しセルショナードの片付け残つてますが）。

bubbu様、本当に素敵なイラストをありがとうございました！

## おまけ番外編 親子の朝。

「おかれりなさいーー 父さまーーー。」

元気な声が聞こえると同時に、ボフッとしたジャステインの上に重みがかかった。

「……ただいま、クリス。 それから、おはよう。」

掛け布にそっと潜り込むショーラを横田に見ながら、ジャステインは向きを変えた身体の上から滑り落ちそうになるクリスを掛け布越しに抱きとめた。

クリスは嬉しそうに笑い声をあげる。

「おはようござります、父さま。」

丁寧に挨拶を返す息子の頭を撫でたジャステインは、少し驚いた様子で微笑んだ。

「いつの間に転移ができるよつになつたんだ?」

「父さまが、セルシヨナードまでおつかいに行かれてるあいだですーーー。」

顔を輝かせたクリスの答えに、ブツと吹き出すショーラの気配がする。

それからショーラは笑いを堪えながら起き上がった。

「父をまた驚かせたいって、一生懸命練習したのよね?」

優しく口を添えるショラがいつの間にか夜着を纏っている事に、ジャステインは意味ありげな視線をやり、それから嬉しそうにクリスを強く抱きしめた。

「すっかり驚かされたよー！」

声を上げて笑いながら苦しいと訴えて逃れようとする息子を、更に強く抱きしめて何度もキスをする。

やっと解放されたクリスはよろよろとしながらも立ち上がり、ジャステインに意志の強い視線を向けた。

「父をまた…ボクはもう赤ちゃんじゃないんですから、キスをするのはやめて下さい…！」

「そうか？ それは少し寂しいな。では、お前がいなくなつたとテイラに心配をかける前に早く部屋に戻つた方がいいんじゃないかな？」

苦笑するジャステインの言葉に、クリスは「そうだつた！」と言いいながら、今度は扉から走つて出て行つた。

それを見送つたジャステインは、未だ笑いを堪えて震えている妻をそつと引き寄せて押し倒す。

「クリスはいつの間にこんなに早起きになつたんだ？」

「今日だけよ。昨日はあなたが遅くなるのがわかつっていたから、今田は早起きして父をまた会うつて意気込んでいたの。すぐに身支度をして戻つて来ると思うわ」

「もう一度、この夜着を脱ぐ時間は？」

「ないでしょ、うね」

「残念だな」

そう言いながらも、ショーラに軽いキスを落として起き上がったジヤステインの顔は幸せそうに輝いている。

ショーラもまた、そんなジヤステインを見て幸せそうに微笑んだのだった。

**おまけ番外編 ハナの才能。（前書き）**

以前、本編に掲載していたものをこちらに再掲載させて頂きます。

「何だそれは？」

- ۱۷۷ -

書物机に向かって、花は、いつものよに突然、からルーケに声を掛けられて悲鳴？　を上げた。

「だから、いきなり声をかけるのはやめてトセいつて書ひてゐるじやないですか！——ああ……線が歪んでしいました」

111

花の反応に微妙な顔をしていたルークだが、結局はいつもの様に花の抗議を無視して質問を続けた。

「で、なんなんだ？」

「犬を描いていたんですね」

犬？

眉を寄せるルークに、花は弁解する。

「線が歪んでしまったから、そうは見えないかも知れないと

•  
•  
•  
•  
•  
L

「 犬には四本の足があつたと思つが……どこにあるんだ? 」

「 い、これから生えるんです! 」

「 ……そつか 」

どうやら花には絵の才能がないらしい事を知つたルークは、それ以上絵の内容について触れる事はやめた。

「 それで、何を思つていきなり犬を描いているんだ? 」

「 思い出したんです 」

「 何を? 」

「 学校の調理実習の時、友達の沙耶に『花は料理界の岡本太郎だ』つて言われた事を 」

犬に棒 ではなく、どうやら足らしき物を描き足した花はルークに向き直つて答えた。

が、言葉の意味も何もかもがよくわからない。

「 どういう意味だ? 」

「 岡本太郎氏は芸術家なんですが、芸術だけでなく民族学などにも造詣が深くてピアノに関してはプロ級の腕前だつたそなんです! そして代表作の一つには『太陽の塔』があるんですよ。思わず『月光の塔』を連想してしまいますが、そびえ立つその姿はまるで違つてとてもユニークなんです。ただ残念ながら『太陽の塔』の第四

の『顔』は行方不明になつていて、未だに手掛けがないんです。まさか廃棄処理なんて事にはなつてないといいんですが……」

「…………やつだな」

花の説明はやはり意味不明であります理解出来ないのだが、ルークは頷くしかなかった。

「で……ハナと料理とその人物とどう関係するんだ?」

「爆発するんです」

「は?」

なんとか理解しようと努力したルークの問いは、更に謎を呼んでしまう。

「私がお料理すると、なぜか爆発するんです」

「何の魔法だ、それは?」

「ええ? 魔法の訳ないじゃないですか。自然現象です」

「…………明らかに不自然だろ?」

「そ、そんな事はないと思ひますけど。私はただ……ちよつと、お料理が苦手なだけで……」

「…………ちよつと、か……」

小さく呟いたルークは、間違つても花が調理場に足を踏み入れる事がないようになると、周囲に徹底させる事にしたのだった。

## おまけ番外編 ハナの才能。（後書き）

読んで下さり、ありがとうございます。

今年は岡本太郎氏生誕100年です。

復元された第4の顔「地底の太陽」は万博記念公園内の施設にて1

0月10日まで公開中です

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3233p/>

『猫かぶり姫と天上の音楽』イラストギャラリー

2011年10月9日00時30分発行